国語　京都大学　文系学部（前期）１／３

一

問一

外国語を懸命に学ぶうちに、母語によって形成されてきた自分の枠組みから解放され、新たに別のまっさらな自分が生まれ出るような感覚を得て、幸福にひたる状態。

（解答欄３行）

問二

人から評価されずとも、自らを賭けて取り組める将来の道へと自らを追い込んで自身を鼓舞しようとする心情。

（解答欄２行）

問三

母語とは異なる言語を習得する過程は、母語においてはすでに陳腐化していた言葉の一つ一つに、全く異なる名を与えていくという新鮮で魅惑的な営みだということ。

（解答欄３行）

問四

一風変わった歌であり、逆説的な箴言や一般的な固定観念への皮肉とする説など解釈は様々あるが、自明視されてきた言葉の意味の再考を迫り、言語の新たなありように期待を抱かせる、妙に心惹かれる歌だと考えている。

（解答欄４行）

問五

既存の言葉の意味を自明視すると、賢さと「頭」、幸せと「お金」を結び付けてしか考えられないが、外国語を学びその自明性を再考して言葉の意味を掴み直した気になっても、言葉の意味や言葉相互の関わりが豊かな可能性に開かれていることを痛感させられることになるから。

（解答欄５行）

©河合塾　2024年

二

問一

芸術の究極目的が、個人による創作という観念から切り離された永遠に自立する作品の創造である以上、芸術家が作品の有限性を超えようとするのは自明の理だということ。

（解答欄３行）

問二

自らも含め全てが消滅を運命づけられている以上、自らの死後にも永遠に存在しつづける作品の創造をめざす芸術家の願望は、根拠のない愚かな虚栄だと批判すること。

（解答欄３行）

問三

芸術作品の永遠性とは、時間における事実としての不滅を言うのではなく、その作品の内的価値が未来永劫に渡って享受されるだろうという予感を指していること。

（解答欄３行）

問四

その固有の価値が永遠に享受されるという予感を抱かせる芸術作品は、人類全体に感動を与える可能性を潜在させているが、多様な享受の仕方に基づく執拗な抵抗を経た後に、ようやく万人に受け入れられるようになること。

（解答欄４行）

問五

この世に存在する無数の芸術作品のほとんどは、一時で消え去る特殊な価値しか持っていないが、現実の作品の儚い美の数々こそが、永遠性と普遍性をかねそなえた万人の心を動かす芸術を産出する肥沃な基盤となること。

（解答欄４行）

©河合塾　2024年

三

問一

父が亡くなった後も、作者自身は思うにまかせぬ命をながらえてしまって、父の三十三回忌を迎えたということ。

（解答欄２行）

問二

今回の勅撰和歌集には父の和歌が撰ばれなさらなかったことが悲しい。私が、まだ宮仕えしていたなら、どうして入集をお願いしないだろうか、いや、しただろうに。

（解答欄３行）

問三

和歌浦にむなしく捨てられている漁師の舟のように、私は和歌の世界で無益に見捨てられている尼にすぎない。

（解答欄２行）

問四

作者は、父も祖父も母方の祖父も、それぞれ勅撰集に入集した歌人であり、双方の家系から言っても和歌の世界で無視されてよい存在ではないということ。

（解答欄３行）

問五

夢に現れた父に、身分にかかわらず秀歌は評価される世の中だから、和歌の詠作を続け、それを書き留めなさいという趣旨の和歌を詠みかけられ、父祖が遺した歌人としての名声を継承しなければならないと自覚したから。

（解答欄４行）

©河合塾　2024年